欽定會要

百十三代 靈元院

二十四書 齋白合

貞享二年十月

伊地知文庫
文庫20
48

文庫
46

友

救濟法師

ふるなる城
月ぞ見ぬ梅のもとの
ちる

さとふる月は気ハあるうち
秋さけば岩間ふるの秋乃水

伊地知氏書冊

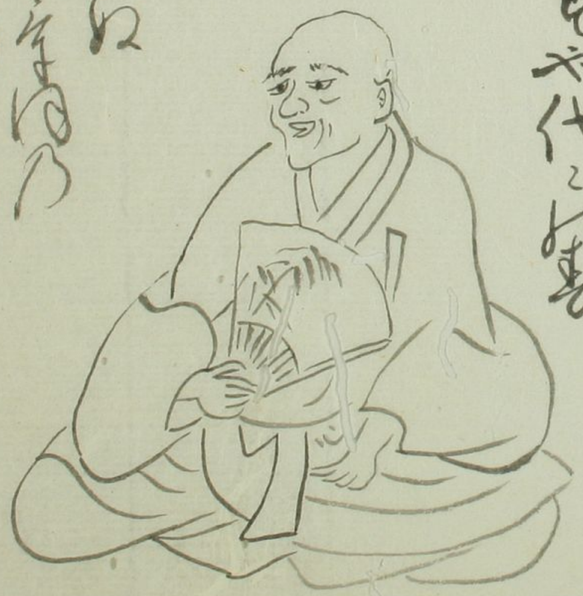
右一　良弁僧正

ちりしをれとはなるあはれ
むかしをうつす

うえちりすてしあのあと
ちりひろはれのあと
よむ寄れば字乃枯葉よ
ひ咲ゑ

右二　周防僧正

玉松乃葉のあるかとや代こ姿



ふるさとのもとあるは
雪とあるはものこと
ゆきとあよ

右二　梵燈庵主

時雨ぬるたびごとや秋の花

ふるさとの
秋のさびしさ
木染めく嵐の末の
もみぢ落

五三　蜷川親当

名をとめぬ小菊花さく
川邊かな

ひとりもいそげ
あるまの東
野辺の花のつきぬ形
身をとちく

右三

能所

右四

梶大信知心教

右の

蓮如つき風流絵かく

宗祖法師

ら流さてもいきの

波岸

立田よりそれとこそ乃山桜

九五

法眼雪順

秋をくれ月をいつとも分ぬ

宿りさだめ蛍ぬ

流れ来る一筋

柳咲て

右五　宗祇法師

世とゝもにさてふ財宝乃やとる

山やゐ乃陰よりあらん
梅を人とゝうか
やとの梅

左六　平賢盛

きを山乃紙ゝまゝ記置るゝ

かるゝみれひとゝ
はれなるゝ
昔乃紫のゝ松ゝれ
松さひゝ

右六　法京行助

ひとまゆくらゐのうらをとう宿

きくもたれ若やうきほ
月よりきこしめんとをとこの
ゆふ煙

左七　あつ良改弘行

月を秋あきらかこそ
一歌の郎

さきはまくはるはいとをとよ
あるとをもとをぬる弥の
かしちをく

右七　法橋兼載

秋の風ふれなるくれ
ゆるる葉

ちるしぐれ
なるとなるうん
葉をとゞむのかさうら
美の原

右八　牡丹花

落書き本乃紫色こゝ

なみしの系は
秋うあらむる
ちうりやむる白色
あもひ美

右八　桜井基佐

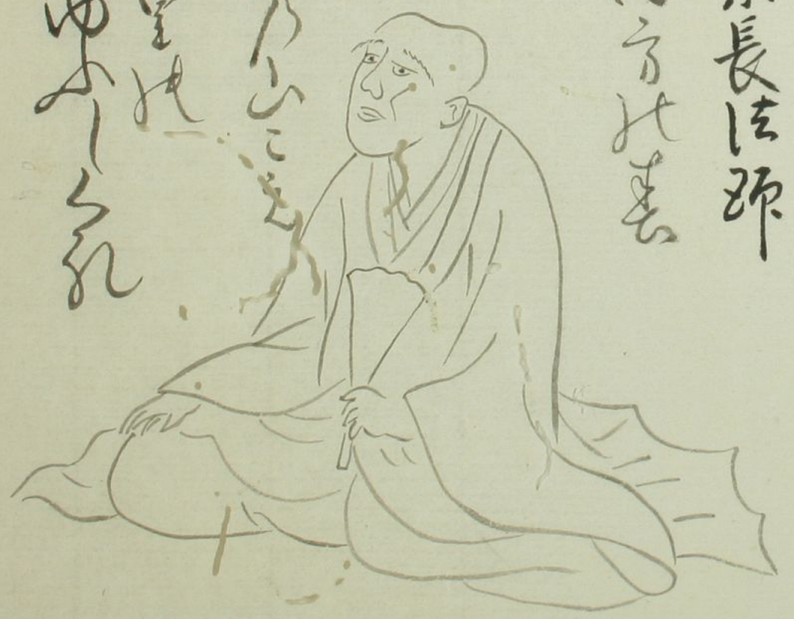
水鳥の底なさけなる岩間哉

さゝぬ小鳥の
あつまりてなる
我やとも枝の宮花ぞく
夕日哉

右九　宗長法師

一なかふさくやこのむ山ざくら

あふ人いろふかしこそ
時雨なれ　忘へのはる
ゆふしぐれ



右九

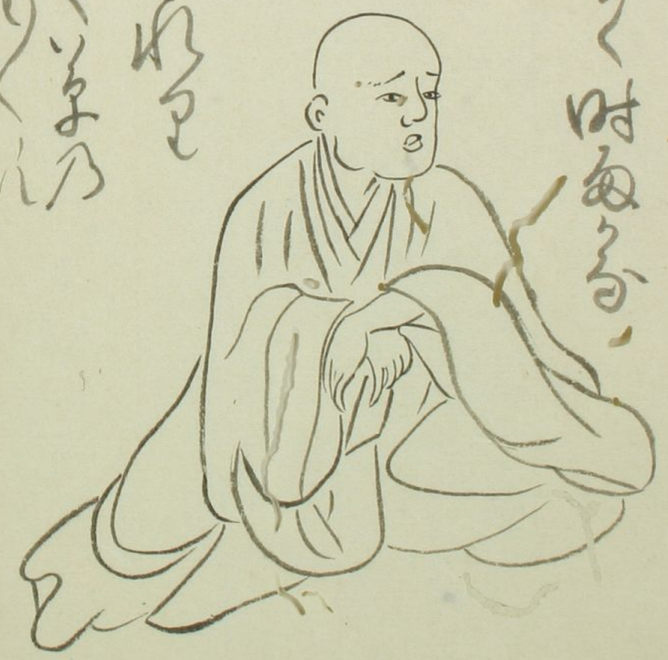
宗碩法師

左十

宗牧法師

右十　宗養法師

山柴乃夕日うよまく時毎者
雲乃ゆくへ
みるとはいつまくまの
きりくれ



左十一　法橋紹巴

月や行月をや待ま秋
雨くよ恋ぬ秋枝
山鳥の声より
明ぬ命

右十一

法橋昌叱

落葉の下ゆく水はあるかなし

蕭々木枯るるも
月はさやかに冴ぬ
窓の戸叩くく水鶏よ
起出て

法橋玄仍

さて扨石の名国土の表ひろる

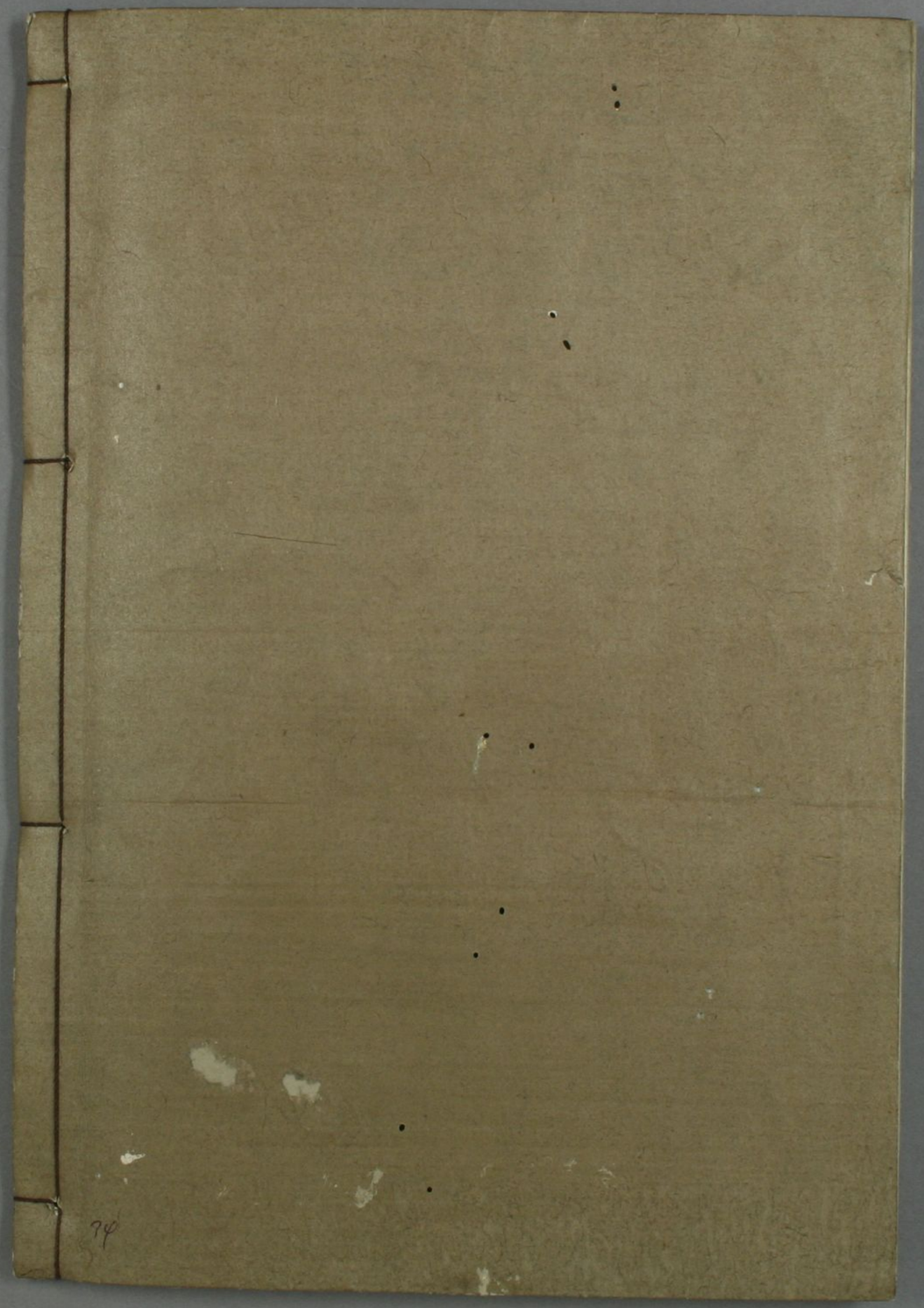
扨乃月の出も
其の表乃のうちも
なもうさて

右十二　法橋昌琢

下まの人忠のねぶる胡蝶哉

ねぶのひまをくつるを
惜うせ
ゆやすれば庭のひまの
月かはひえる

二十四人逸歌仙

えらびたまひし人々あれども
白雪の句を言ひ出し者は
きゝ知る人は
笑ひたまふ
りて
しをり
変化
発句を別
右卒尔ながら
貞享二乙丑暦初冬下旬　書林井上宇平

付一冊者大坂天満宮社司渡邊氏
吉豐所拾事也書写了　于時
寛政年三　十二月六日　法眼　諱宣